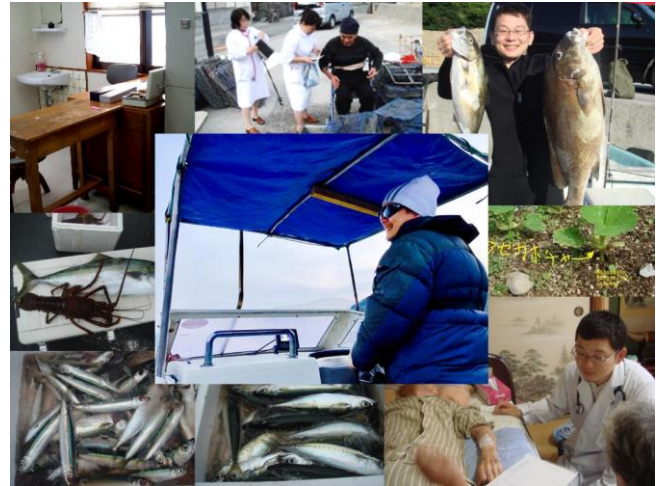




[氏名] 松本 健吾
[出身都道府県] 愛媛県
[卒業期] 24期（平成13年度卒）



自治卒初期研修の後輩たちへ

テーマ1 初めての患者さん

診療所での一番最初の患者さんのことは忘れられないものです。もう20年前になりますが、80過ぎの女性の方でした。

私：『こんにちは、今日はどうされましたか？』

患者：『アワヨガジャンジャンするんよ～』

私：『????』

後ろに立っていた年配の看護師さんが私の耳元でそっとささやきました。

看護師：『带状疱疹ができて痛むようですよ』

私：『ああ！それは大変ですね～、だいぶ痛みますか？』



患者：『それが、ガーイニ』

私：『????』

看護師：『かなり痛いといわれています』

そう、僻地診療所に赴任した医師に最初に求められることは、方言を覚えることです。大きな病院での初期研修とは求められることが大幅に違うことにめんくらうかもしれませんが、自治医大に入学した時のことを思い出せばよいと思います。全国から、自分は標準語を話している（と思っている）学生が寮のラウンジではじめての挨拶をした時の違和感です。でも、すぐに慣れますが。

テーマ2 パラダイムシフト（価値観が変わった）

患者：『若先生（と呼ばれていました）、隣家のトミさんの薬ももらって帰りたいんじゃが・・・』

私：『申し訳ない！それは、無診療処方といってできないですよ～』

患者：『いや～、トミさん体調が悪くて診療所にいけないから先生によろしくって』（体調が悪いなら診療所にくるべきでは？）

都市部では体調が悪い時に病院に行くわけですが、僻地診療所は受診出来ている時点で体調はもう OK なわけです。この場合の対応方法の正解はこれだ！とはいえませんが、この時は、とりあえずお薬を渡してもらおうようお願いしておいて、後で



往診の合間にトミさんの様子を見に行くことにしました。僻地診療の最終兵器、往診です。

テーマ3 『いや～それはもらえないんです（が…）』

上記トミさんのところなどに往診に行くこととたいいてい、お土産がついてくることが多いものです。もちろん市町村職員としてお心付けのようなものをもらうことは厳禁！（ですが）診療所の勤務中に結局いただいてしまったものベスト3

1位：生きた蛸

私：『トミさん大丈夫そうなので帰りますね』

トミさん家族：『先生、ちょっと待ってもらえますか、すぐそこの岩穴から蛸の足が見えているのがいて、すぐに捕まえますから！』（それはいりません！とは言えなかった…）





2位：畑

腰椎圧迫骨折さん：『先生、腰のこともあるんですが、折り入って頼みたいことが…』

私：『なんでしょう？』

腰椎圧迫骨折さん：『私の畑をあげるけん、手入れしてほしいんです！』（野菜の作り方をご指導いただきありがとうございました、私が腰痛になりました）



3位：漁船

在宅患者源さん：『先生、わしはもう船には乗れませんかな？』

私：『そうですねー、（もう寝たきり状態3年目ですし）船で漁に出るのは少し難しいかと』



在宅患者源さん：『わかった、じゃあわしの船は先生にあげるわ！船は動かさんとす
ぐにだめになるんじゃ、先生、大事に乗ってあげてもらえんか？』（まじか…）

テーマ4、町の人と一緒に生活する（遊ぶ）診療所勤務の一日

4:00～起床、地元の猟師さんとカツオ漁に出船

8:00～漁協に魚をあずけて診療所へ

9:00～診察開始、午前中は外来

12:00～お昼休み、畑を耕す

13:00～午後は往診

18:00～漁協の魚卸場で開催される売れ残った魚での宴会に参加





私の僻地勤務はこんな毎日でした。地域によって、まったく違うストーリーになる
とは思いますが、地域の人と楽しい生活をおくるといふ視点ももってみることをお
すすめします。きっと、僻地診療が2倍楽しくなるはずです！



